

佐賀県医療センター好生館看護学院 令和5年度自己評価

分野	項番	評価項目	取組実績（令和5年度）	自己評価		
				出来ている	一部出来ている	出来ていない
学校運営	1	学校のビジョン及びそれを実現するための組織目標を策定しており、教職員に理解され看護学院の年度目標に反映しているか。	好生館の中期目標及び学院の教育理念、教育目的に沿って、組織目標を設定し、学校運営に当たっている。 年度目標を具体的な行動レベルに落とし込んだことで、目標を達成する取り組みが段階的に着実に実施できている。	○		
学校運営	2	学院の運営に関する委員会の目的が明確であり、十分に検討されているか。また、決定事項は周知徹底できているか。	学院運営の基本的項目については毎月2回開催する運営会議で全て議論し、決定している。運営会議の結果は各学科とも教務会議を行い各教員に周知している。 また法人(病院)全体の重要事項を議論する好生館の統括責任者会議の結果についても、必要なものは職員に周知している。 このほか、入学式等全職員の共同での作業が必要なものについては職員会議を行い、情報を共有している。	○		
学校運営	3	より良い学生を確保するために、入学生の募集活動の充実を図り、志願者数の増につなげているか。	志願者を確保するために、次のような取組みを行い、助産学科で5倍強、看護学科で約3倍の受験倍率を確保した。 ・一昨年更に内容を充実させた学院の紹介パンフレットについては、印刷部数を1500部→3000部に増やした。これまで高校生の手が届くことを意識して配布していたが、増刷分については、両親、祖父母の目にも触れるように、県内の医療機関、高齢者施設等にも配布した。 配布に当たっては、好生館だよりの10月号送付時に同封してもらうことにより、送付費用と作業量の軽減を図った。 ・ホームページについては随時更新を行い、情報発信に努めた。 ・県内の普通科高校の進路指導室を訪問し、学院のPRを行うとともに、学生の進学希望状況の情報収集を行った。 ・学校説明会（オープンキャンパス）については、助産学科が4日間で延べ4回開催し、54人、看護学科が4日間で延べ10回開催し、114人の参加があった。 ・学校説明会では、1回あたり15人程度に参加人数を制限し、在校生と交流できるようにしていることが好評であった。 ・助産学科・看護学科ともに面接時間を確保するために2段階選抜（1次試験(学科)、2次試験(面接)）を実施している。	○		

分野	項番	評価項目	取組実績（令和5年度）	自己評価		
				出来ている	一部出来ている	出来ていない
			<ul style="list-style-type: none"> ・助産学科は社会人の受験者が多いため、受験しやすいように土曜日に試験を実施している。 ・優秀な学生を確保するために、以前実施していた集団面接ではなく個別面接を行っている。 ・面接時間の設定の際には、遠隔地の受験生に配慮した。 ・サガラボや専門学校ナビを活用した広報に努めた。 ・佐賀県補助事業の専修学校を紹介する校内ガイダンスのうち当学院への進学実績がある高校の校内ガイダンスに参加した。 <ul style="list-style-type: none"> ・佐賀東高校 3年生 6/13 ・佐賀清和高校 1・2年生 7/21 ・神埼高校 1年 10/20 ・鳥栖高校 1・2年 10/27 			
学校運営	4	卒業生の県内就職率を高めるために、学生への情報提供等が充実するよう工夫をしているか。	<p>入学者説明会や個人面談等の機会を捉えて、佐賀県内の就職情報を積極的に紹介するとともに、学生から相談を受けた際には県内就職を推奨している。</p> <p>（助産学科） 令和5年度の県内就職率は58%と令和4年度（75%）を下回った。</p> <p>（看護学科） 令和5年度の県内就職率は84.4%と昨年を上回った。3月14日には令和6年度3年生に向け好生館からの説明会を実施した。</p>	○		
学校運営	5	災害など非常時に学校活動が継続できる体制が整っているか。	<p>非常時に学校活動を継続させるために、次のような取組みを行った。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・非常時にLINEを使って学生に連絡できる体制を整え、実際に通報訓練も行った。なお、緊急時は学院に登校せず、自宅スマホから送信できるようにしている。 ・新型コロナウイルス感染症の蔓延による休校、学生が濃厚接触者になった場合など、学生が学院に登校できないときに、Zoomを使った遠隔授業を行う体制を整え、実際に一部実施した。 ・災害時に備え、備蓄用ご飯、乾パン、水の備蓄を行っている。 ・災害時に帰宅できない学生を学内に一時宿泊させることとしている。 	○		

分野	項番	評価項目	取組実績（令和5年度）	自己評価		
				出来ている	一部出来ている	出来ていない
学校運営	6	講義や実習を行うために必要な施設整備を行っているか。また学生の自主的な学習の場が確保されているか。	<ul style="list-style-type: none"> ・好生館が電波時計をインターネット時計に交換したことに伴い、不要となった電波時計 40 個を譲り受け、学院の時計の更新・追加を行った。 ・体育館でプロジェクター投影を行うために 200 インチのスクリーンを壁面に取り付けた。 ・校務支援システムの導入、教務事務の事務移譲により教員の授業研究や学生指導を行う時間を確保できている。 (助産学科) ・高機能の分娩介助シミュレーターを技術チェックや客観的臨床能力テストに活用し、学生の臨床判断能力が向上した。 ・実習室の洗面台、器械棚を改修した (看護学科) ・各学年の教室が手狭で床設置タイプのプロジェクターが使用しづらかったため、天井設置型プロジェクターを各講義室に設置した。これにより講義室の環境が改善したとともに、機械のトラブルも少なくなり授業開始がスムーズになった ・令和5年度入学生より電子教科書を導入した。導入、運用ともに特に問題は生じなかった。 ・研修室、コモンスペース等を自習室として開放することで自主的な学習の場が確保できている。またビジュランサプスクリプションの導入等、自己学習できる教材を提供している。 	○		
学校施設	7	図書室の整備や福利厚生施設の整備等、学生のための環境整備は行われているか。	<p>学生のための環境整備として次のような取組みを行った。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教室棟 2 階のトイレ 4 基を温水洗浄便座に改修した。これにより 2・3 階のトイレは全て温水洗浄便座になった。 (参考) 1 階（5 基中 1 基洋式、4 基和式→R6 年度夏休みに工事予定）→この改修が終われば、全て改修済み ・学生寮の脱衣所について、学生から暖房器具設置の要望があったため、暖房器具を設置した。 ・通学生用駐車場として使用しているグラウンドに照明がなかったため、照明器具を設置した。 ・学生用ロッカーが老朽化していたため、3 年生用を買い替えた。（1・2 年生用は R6 年度に買い替え予定） ・学生用更衣室の入口にカーテンを設置した。 	○		

分野	項番	評価項目	取組実績（令和5年度）	自己評価		
				出来ている	一部出来ている	出来ていない
教育活動	8	卒業時において持つべき看護師・助産師の能力を、教育目標に明示しているとともに、卒業時の到達状況を分析しているか。	<p>（助産学科）</p> <p>教育目標をシラバス、実習要綱、学生便覧に明示している。科目ごとにシラバスに沿った客観式テスト又は論文体試験の実施及び分娩介助技術評価（前期2回、後期1回）を実施し、客観的評価を行った。</p> <p>形成的評価に加え、卒業時に分娩介助技術評価、総合評価、実習記録についての評価・分析を行い、年度末の実習指導者会議においてその内容を確認した。</p> <p>全国助産師教育協議会の「助産師に求められる実践能力と卒業時の到達目標と達成度」に基づいて入学時と卒業時に学生の自己評価を行っている。</p> <p>（看護学科）</p> <p>入学時及び各学年の初めにシラバスを用いて教育目標の説明を行い、浸透を図っている。</p> <p>3年次には知識・技術・態度を統合した臨床実践能力を客観的に測るためOCSEを行い、卒業時のレベルに到達していないと判断した場合は繰り返し指導を行った。</p> <p>また、実習では3年間の実習を振り返り、その学びを主たる実習施設である好生館に伝え課題を話し合っている。</p>	○		
教育活動	9	学習内容は、教育理念・教育目標と一貫性があり、時代の要請に応える内容になっているか。	<p>教育理念・教育目標に沿い、講義・実習を行うとともに、時代の要請に応じ構成した以下のような新カリキュラムを実施した。</p> <p>（助産学科）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・正常な妊娠・分娩・産褥期の観察とケアに加え、ハイリスク妊娠・分娩についても経験できる実習内容と、それを学べる実習施設の協力を得られている。 ・地域の母子を支える役割として、助産所3か所、産前産後サポートステーション他、地域母子保健実習での学びが、将来の助産師としてのキャリアビジョンに繋がっている。 ・プレコンセプションケアの講義の内容に、看護学科1年生へのピア講義として避妊や性感染症、自分の体を大切にするという内容の講義を引き続き実施している。 ・事例検討や研究の基礎、ポートフォリオ作成などを通して、学問への探求心と学び続ける態度を養っている。 <p>（看護学科）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・医療の場が地域に移行している現状を鑑み、2年次に地域療養を支える看護Iを新設し、入退院支援センター、地域医療支援センターの看護師の講義を取り入れ、両センターにお 	○		

分野	項番	評価項目	取組実績（令和5年度）	自己評価		
				出来ている	一部出来ている	出来ていない
			<p>ける実習も導入した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・第3次救急医療機関である好生館と母体を同じくするという特徴を踏まえ、クリティカルケア看護を新たに1単位新設し、好生館の医師、認定看護師に講義を依頼した。 ・看護について深く考え、追求するために令和4年度に新設した「看護の探究」では、講義の中で課題として出した「私の看護観」を全国看護学生作文コンクールに応募し、2200に及ぶ作品の中から1名が審査員特別賞、1名が佳作、団体として最優秀団体賞に2年連続して選出され、表彰を受けた。 ・佐賀県医療センター好生館をはじめとした認定看護管理者2名、専門看護師1名、認定看護師22名を講師に迎え、専門性の高い講義を実施した。 			
教育活動	10	授業計画は、教育課程との整合性があり、授業内容や指導方法が学生レベルに合うよう工夫・改善されているか。	<p>（助産学科）</p> <p>入学時にシラバスに沿って教育計画について説明し、学生が授業内容を理解できるようにしている。</p> <p>講義は正常から異常へ、妊娠期から分娩期、産褥・新生児期へと学生が理解しやすい順序となるよう時間割を調整している。</p> <p>臨床での助産実践を想定し、学生自ら考え実践するアクティブラーニングを導入している。</p> <p>また、実習前にシミュレーション学習を活用し、臨床判断能力の向上に努めた。</p> <p>講師については、各分野で専門的な業務を実践されている講師に講義を依頼し、専門性の高い内容となった。</p> <p>（看護学科）</p> <p>教育課程に沿った授業計画を作成している。</p> <p>特に概論から各論、疾患から看護など、学生が理解しやすく、且つ学びの積み上げができるよう順序を考え時間割を組んだ。また、各実習に必要な講義は実習までに受講するよう進度を工夫し、実習で知識・技術が活用できるようにした。さらに各学年の進度に合わせ授業内容を構成し、学生の理解度を確認しながら授業を進めた。</p> <p>シミュレーション教育を導入し、臨床判断能力の育成を図っている。</p>	○		

分野	項番	評価項目	取組実績（令和5年度）	自己評価		
				出来ている	一部出来ている	出来ていない
教育活動	11	単位認定の方法（評価基準や方法等）を、各科目担当者が理解しており、評価については妥当であるか。	<p>（助産学科）</p> <p>外部講師にも講義初回に評価基準・方法を説明し理解を得ている。学院教員と共に評価計画・評価方法に沿って妥当な評価を実施している。</p> <p>（看護学科）</p> <p>評価計画を基に外部講師・学院教員共に妥当な評価を実施している。</p>	○		
教育活動	12	実習目標が達成できるよう実習施設との連携を行い、学生を支援する体制は整っているか。実習計画は施設に周知されているか。	<p>（助産学科）</p> <p>実習要綱及び実習指導要綱を実習指導者に配布し、実習目標を共有している。実習開始前に各実習施設に出向き、個別に打合せを行っている。</p> <p>実習期間の節目に反省会、または指導者との話し合いの場を設け、実習目標の達成に向けて調整を行った。その結果、12名全員が10例の分娩介助を達成できた。</p> <p>3月に8医療機関と助産学実習評価会議を行い、実習全体の評価を指導者と共有し、次年度の実習指導に役立っている。</p> <p>（看護学科）</p> <p>実習要綱に指導要領を追加し指導の要点を明文化した。実習指導者に配布するとともに実習領域毎に実習開始前の実習指導者会議を行い、実習目標や指導方法の共通理解を行っている。</p> <p>実習中は施設の実習指導者とコミュニケーションをとり実習計画や指導方法の調整などを行った。</p> <p>実習終了後に各医療機関と実習まとめの会議を行い、実習全体の評価を指導者と共有し、次年度の実習指導に役立っている。</p>	○		
教育活動	13	学生の実習時のインシデント事例や感染リスク等について、教員は把握・分析を行い、学生指導に生かしているか。	<p>過去のインシデントの集計結果から学生のインシデントの傾向を把握し各学科で共有した。実習ではインシデントを起こしやすい時期に学生に注意喚起を促す働きかけを行っている。</p> <p>事前にこれらの取り組みを行った結果、各学科の発生状況は次のとおりとなった。</p> <p>（助産学科）</p> <p>令和5年度のインシデントは5件であった。内容は実習中の書類管理、実習中の報告の不備等であった。</p> <p>（看護学科）</p> <p>令和5年度の学生からのインシデント報告件数は20件、</p>	○		

分野	項番	評価項目	取組実績（令和5年度）	自己評価		
				出来ている	一部出来ている	出来ていない
			<p>教職員から1件で昨年度より増加していた。学年別内訳は1年生4件、2年生7件、3年生9件であった。レベル4が1件（1年生の情報漏洩）、他は1～2のレベルであった。</p> <p>インシデント発生時は、学生と教員で原因分析を行い、対策をとることで再発防止に努めた。</p>			
教育活動	14	国試合格 100%を目指し、取り組んでいるか。	<p>（助産学科）</p> <p>次のような取組みを行い、7年連続で国家試験合格率100%となった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・入学前から国家試験の過去問題を提供し、学生の意識を高めている。 ・入学後は国試対策の時間を設けて指導し、毎月学生の学習状況を把握し、個々の学生に合わせたサポートを行った。また9月～2月に10回の模擬試験を行い、結果について教員と学生で分析し、不得意分野の攻略法を指導している。 ・個々の学生の個人差があり、最終の模擬試験でも成績が伸び悩む学生もいたが、個々の学生のサポートに力を入れている。 <p>（看護学科）</p> <p>下記の取組みを行った</p> <ul style="list-style-type: none"> ・全学年の国家試験対策委員と教員で構成する国家試験委員会を定期的に開催した。各学年の国家試験委員がそれぞれ工夫しながらクラスの士気を高めるよう働きかけている。国家試験前には下級生から3年生への激励会、国家試験終了後には3年生から下級生に学習方法等を伝える機会をもち、学生のモチベーションの向上を図った ・国家試験までのカウントダウンを全学生が見える場所に掲示した。 ・成績が低迷していた学生に対しては教員の講義、グループ学習、個人学習への支援等、その学生の個別性に合わせた学習を支援した。 <p>国家試験合格率は97.6%と昨年の100%より低下したが、学生アンケートにおける学院の国家試験対策への満足度においては92%に上った。</p>	○		

分野	項番	評価項目	取組実績（令和5年度）	自己評価		
				出来ている	一部出来ている	出来ていない
教育活動	15	教員に各種研修会への参加、研究調査活動の機会を与えるとともに、教員自身も自己研鑽に努めているか。	<p>（助産学科）</p> <p>全国助産師教育協議会のオンライン研修をはじめ、関連する学会や研修などにも積極的に参加している。R5年度の日本母性衛生学会では教員も共同研究者として演題発表に関わった。全員自己研鑽に努めている。</p> <p>また、助産師教育に関する全助教のファーストステージ研修、学生と共に母体救命研修などを受講し新しい知識を取り入れている。</p> <p>（看護学科）</p> <p>教員9名全員が自分の専門領域のみならず、各分野の複数の研修に積極的に参加し研鑽を積んだ。</p>	○		
教育活動	16	授業評価を実施し、授業の改善に努めているか。	<p>学生による授業評価又は教員同士の他者評価等を実施している。</p> <p>また、授業評価は内容の理解、教員の授業姿勢、資料について行い、評価結果を基に授業を継続的に改善していった。</p>		○	
学生支援	17	進学、就職などの進路に関して学生の相談に十分応じているか。	<p>（助産学科）</p> <p>入学時に早目の就職活動を促すとともに、学生全員に個別面談を開始している。就職支援としてジョブカフェやマイナビの研修を取り入れ現在の就職活動の実際に触れる機会を設けた。学生一人一人の要望に応じて、履歴書作成、論文や面接の指導を行うなど就職内定までサポートしている。実習前のあわただしい時期と重なるため実施回数は多くない。面接指導等の充実が今後の課題である。</p> <p>（看護学科）</p> <p>1年次より定期的に面接を行い、進路のアドバイスを行うとともにマイナビの研修等を取り入れ、自己分析や小論文対策を早期からできるよう計画的に進めている。3年次は履歴書作成指導、小論文指導、面接練習など一人一人に対し丁寧サポートを行った。学生アンケートでは92%の学生が「十分サポートを受けた」と回答した。</p>	○		
学生支援	18	学生等の健康管理の充実を図るための体制の充実が図られているか。	<p>好生館に校医を依頼し、相談しやすい体制を整えている。</p> <p>インフルエンザワクチン及びB型肝炎ワクチンについても、毎年好生館で接種させている。</p> <p>定期健康診断で異常が見られた学生には受診勧奨や生活指導を行っている。また、感染予防の指導を行い、感染症が疑われる場合は受診を勧め拡大防止に努めている。</p>	○		

分野	項番	評価項目	取組実績（令和5年度）	自己評価		
				出来ている	一部出来ている	出来ていない
学生支援	19	学生等に対する心のケアを図るなど、生活支援の充実がなされているか。	<p>（助産学科） 実習や課題、テストなど多忙な学生生活で、特に実習中のストレスは大きく、メンタルの不調をきたす学生もいたため、スクールカウンセラーや学校医のメンタル相談などを活用しメンタル面のサポートを行い効果があった。</p> <p>（看護学科） 気になる学生については早めに声をかけ、教員が面談するとともに必要時はスクールカウンセリングを勧めた。</p>	○		
学生支援	20	経済的に安心して学業に専念できるよう支援の充実がなされているか。	<p>給付型奨学金の機関認定について継続認定を受けた。 （助産学科も対象） 令和5年度は23人の学生が給付型奨学金を受給した。 （助産学科は対象者無し） 給付型奨学金の受給者に対しては、入学金・授業料の減免も行った。 さらに、好生館独自の奨学金制度（月額5万円、就職後返還免除有）を設けており、令和5年度は15人が貸与を受けた。 好生館が募集する夕方勤務のナースエイド（時給1,250円）を学生に紹介した。 助産学科に進学する社会人経験者に対する専門実践教育訓練給付金制度の学校指定を受け、6名が受給した。</p>	○		
学生生活	21	交歓会や学院祭、クラブ活動などを通じて学生相互の交流が図られるよう、支援しているか。	<p>感染対策をしながら交歓会、学院祭を実施し、学科間・学年間の交流を図ることができた。 （助産学科） 助産学科学生によるピア講義を看護学科1年生に対し行った。 （看護学科） 学院行事のみならず、看護の探究、キャリア論、看護技術演習等の講義でも学年間で交流できる機会を設けた。</p>	○		
学生生活	22	学院外のイベントやボランティアに教員・学生は積極的に参加しているか。	<p>（看護学科） 兵庫地区の児童クラブ、高齢者サロン、障がい者施設でのボランティアに意欲的に参加している。令和5年度も1年生全員何らかのボランティア活動を行った。 また、福岡県八女市星野村に保存されている原爆の残り火「平和の灯」を北九州市から長崎市まで看護学校学生がリレー形式で歩いてつなぐ「ナイチンゲール平和の灯運動」に学生13人、教員6人が参加した。</p>	○		

